

息子との湯布院旅行

曙クリニク
玉井 修

湯布院温泉の旅館で早めの朝食を食べると、私は小学校六年生の息子と朝の散歩に出かけた。外はまだほの暗く、旅館近くの河川敷を歩いて行くと空から粉雪が舞い降りてくる。息子に生まれて初めての雪を見せることができた。ああ、やっぱり正月旅行で湯布院に来て良かったという気持ちで胸がいっぱいになる。

粉雪の中、静かな河川敷を1時間ほど歩いた。初めての雪だというのに、息子ははしゃぐ様子もなく、ジャンパーの袖口に付いた雪を不思議そうに眺めては微笑むだけで、むしろ大騒ぎしているのは父親の私の方であった。考えてみたら息子と一緒にしゃいだことも無く、ゆっくり話をする機会さえほとんど無かった。雪を見たからと言って今更にはしゃぎ回れるはずもない、寒風吹きすさぶ河川敷を歩きながら、私は父親らしい事を何もしてこなかった自分に自責の念を抱いていた。

自院を開業する年に次男が生まれ、子供は「くえーぶー」を持って生まれてくるから、病院はうまくいくよ等とよく言われた。自院と一緒に成長していった息子ももう12歳。この12年間はめまぐるしく働き、周りを見る余裕も、家族の事を振り返る余裕も無かった。旅行に行こうなどと考えた事も無く、そんな時間があればアレをやってコレをやって等と考え、一生懸命に駆けつけてきた。ふと気がつく私は父親らしい事を何もしていない事に気がついた。私は父親失格だと思った。

湯布院では金鱗湖など幽玄な景色を見て回

り、夕食は旅館で食べきれないほどのごちそうが並んでいた。夕食後に温泉に入ると、湯煙の中息子の背中が見える。いつの間にか子供の背中から少年の背中へと成長していた。もうすぐ私の背丈も追い抜いてしまうだろう。



旅館で寝床に入りながら、息子に昔の話を聞かせてあげた。自転車で遠乗りした思い出を語ると興味を持ったらしく、今度自転車で友人の家に行ってみたいと言う。それは楽しそうだね、と返事をしたが、息子はまだ上手に自転車に乗れないのだ。小学校6年生になっても自転車に乗れないのは、子供の責任ではなく父親の責任なのだろうと思った。もっとこの子の背中を押してやれないといけない。

旅行から帰り、寒さも緩んできたある日、もう一年も前に購入してあった自転車を引っ張り出して息子と自転車の練習をした。最初は転んばかりで、恐怖感からペダルに力が入らない。何度かの転倒のあと、息子の背中を必死で押しながら声をかける、もっと力を入れて、もっと遠くを見て、力を入れろ、勇気を持ってペダルを踏み。そのうちに息子は私の手を離れ、自分の力でどこまでも進んでいく様になった。父親の役割とはこの様なものなのだろう。子供の中にある力を引き出し、背中を押しながら、叫ぶ。もっと力をいれて、もっと遠くを見る、勇気を持って踏み込め。まさに、それは今まで私がこの子に言ってやれなかった言葉そのものだった。